

三位一体論の視点から眺めた奉獻生活の可能性

阿 部 仲麻呂

An Understanding of Consecrated Life and the Mystery of the Trinity.

Nakamaro ABE

Foundation of consecrated life is that "Imitation of Christ" in the perspective of the Mystery of Trinity. Therefore, in this paper, we consider the meaning, practice and efficacy of that "Imitation of Christ." And, this paper also refers to the "listening" as the basic attitude of those who follow Christ. In addition, while exploring the commonality of Japanese culture and Christian faith, and to be also discussed the possibility of modern consecrated life.

要 旨

奉獻生活の土台は三位一体の神の秘義の視座にもとづいて「キリストに倣う」ことである。それゆえに、本稿では「キリストに倣う」ことの意味・実践・効能を考察する。そして、本稿はキリストに倣う者にとっての基本姿勢としての「傾聴」にも言及する。さらに、日本文化とキリスト教信仰の共通性を探りながら、現代の奉獻生活の可能性についても述べる。

I. 奉獻生活を記念する年に

2014年11月30日(日)の待降節第一主日から「奉獻生活を記念する年」が始まった。この祝いは2016年2月2日(火)の主の奉獻の祝日までつづくことになる。この主題をじっくり味わって生きる一年有余を、よりいっそう実り豊かに開花させるためにも、これから奉獻生活の意味を問うてゆこう。その探究の歩みは、「奉獻」という言葉からも連想されるように「自分を奉って相手に捧げ尽くす」という方向性を備えており、常に相

手を優先して支える生き方に裏打ちされているので、まさに「いっしょに仕合わせになる道を進むこと」でもある。なお、「仕合わせ」とは、おたがいに仕え合うことでよろこびを共有して安心感をともなう交流を深めることである。

なお、「奉獻生活の年」は教皇フランシスコの発意によって始められたが、厳密に言えば「今日の教会における奉獻生活の見直し」を目指す黙想のひとつときでもある（註1）。副題として、「福音・預言・希望」という三つの要点も掲げられている。奉獻生活者が福音を基準にして生きることによって預言者的な役割を全世界に対して示すことそのものに希望が垣間見えるということであろうか。「福音・預言・希望」は連続する指標として、キリスト者一人ひとりの生き方を方向付けるものであるが、その道筋を特に心に留めて専門的に生きるのが奉獻生活者に他ならない。

Ⅱ. 本稿の方法論 —— 古代教父による頌榮的思考法と愛徳の実践

ところで、奉獻生活には様々な形態が含まれている。歴史的に古くから存在している「修道生活」をはじめとして、最近になって生じてきた「在俗会」や「使徒的生活の会」などもある。しかしながら筆者は「修道生活」しか経験していないので、奉獻生活を論じる際に、特に「修道生活」に集中して考察を展開せざるをえない。自分が知らない生活形態を論じることはできないからである。

以上の限定を踏まえたうえで、本稿では、古代ギリシア教父たちの三位一体論の視座にもとづいて「修道生活」の意味と可能性に関して考えてみたい。古代ギリシア教父の思想を専門的な研究分野としている筆者にとって、教父たちの讚美頌榮的な思考法は身近で親近感のわく方法論である。教父たちは三位一体の神に感謝と讚美を捧げる信頼に満ちた祈りの生活を土台にしながらも困難な世相のまっただなかで決して希望を失うことなく愛徳の実践に徹した（これは、信望愛という対神徳の深まりである）（註2）。つまり、三位一体の神への「祈りの生活」を土台として社会的にも「愛徳の実践」を広げてゆくことがキリスト者の生き方の基本的方向性となっている。この方向性を、絶えず自覚して生きる決断をするのが奉獻生活者である。

Ⅲ. キリストに倣う——使徒的生活から修道生活を経て奉獻生活へ

1. 使徒的生活から修道生活へ

まず、修道生活の土台として確認すべきことは「キリストに倣う」という主題である。誓願を宣立した修道者は、「キリストに倣う」ことを生涯の目標としている。つまり、修道生活とは、決して自分の考えを押し通すことではない。あるいは、長上や親や親戚の期待に沿うように御機嫌をとりながら生きることででもない。むしろ、キリストに倣うことが誓願を立てる目的である。つまり、誓願とは「キリストといっしょに生涯をともにすること」である。

イエス＝キリストに倣って、その真似をして生きるときに、模範とすべきは歴史上一番最初にその道を選んだ十二人の使徒たちである。十二人の弟子たちはイエス＝キリストといっしょに生活しながら、人びとに奉仕する生き方を貫いた。この生き方が、すべてのキリスト者の信仰生活の出発点となっている。そして、使徒たちの生き方は、まさに教会共同体の始源である。しかも、その共同体の歩みが修道生活の土台になっている。キリストにしたがっていっしょに生きる歩みを真剣につづけることが肝要となる。

それで、十二人の弟子たちが社会的に他の人びとのもとへと遣わされてゆくので、彼らは「遣わされた者」つまり「使徒」と呼ばれている。ギリシア語聖書（新約聖書）では「アポストロス」、つまり「勝利の伝令」という意味がある。人びとを悪の勢力から解放して神の慈愛深さのまっただなかへと立ち返らせる勝利のよろこびの知らせをもたらす者、のことである。それで、「十二使徒」という呼び方で、イエスの復活後の時代を生き抜く指導者たちの存在感が増えてゆく。

こうして、「キリストに倣う」ということは、十二使徒と呼ばれるようになった十二人の弟子たちの真似をしながら成熟して、社会に遣わされてよろこびをあかしする信仰者の歩みを指す。その際、相手の救いを目指して出かけてゆくことが重要となる。使徒的生活へと信仰生活は発展する。

2. 奉獻生活への深まり

そのような使徒的生活の伝統が、第二バチカン公会議（1962-65年）以降は「奉獻生活」という呼び方で発展的に受け継がれている。今日、奉獻

生活は、自分を捧げながらも相手を活かすという、よろこびの広がり生き方として再確認されている。

1996年3月25日の「神のお告げの祭日」には『奉獻生活』(Vita Consecrata)という使徒的勧告が教皇ヨハネ・パウロ二世によって公にされた(註3)。ちょうど、筆者は1996年3月25日に終生誓願を宣立したので、この日のことを鮮明に記憶している。『奉獻生活』という本は、三位一体の神における神内の交わりの高まりと溢れにもとづいて叙述されている。つまり、三位一体の神における愛の交わりの現実が溢れ出るときに世界が創造され、万物の和解が実現し、終末時の万物の理想的な完成が可能となってゆくのであるが、そのような救済のダイナミズムの動的な進展を背景として、その秘義を自覚して生きる者が奉獻生活者としての使命を担っている。

『奉獻生活』という本の第一章は「三位一体の信仰告白——キリストと三位一体の秘義における奉獻生活の起源」と題されており、第二章は「兄弟愛のしるし——教会における交わりのしるしである奉獻生活」と名指され、第三章は「愛の奉仕——世界における神の愛の現れである奉獻生活」を論じている。言わば、第一章は神論、第二章は教会論、第三章は宣教論として眺めることもできる。神の内側の想いは、その志を継ぐ教会共同体において深められつつも、世界全体へと幅広く宣布されてゆくのであり、まさに三章構成の本文全体が神の愛の広がりダイナミズムに沿った叙述となっているのである。このような愛の溢れのダイナミズムは、古代教父以来のキリスト教的教会共同体全体の歴史意識の伝統を引き継いで理解されている認識の枠組みである。

「奉獻生活」とは、自らをあますところなく捧げ尽くすことで神に対する感謝を表明するとともに、あらゆる人にも心を開いて「捧げもの」としての関わりかたを積極的に与える決意を絶えず新たにしてゆく仕儀を指す。

奉獻生活の基本姿勢は「キリストに倣うこと」に尽きる。その際に、洗礼を受けたすべてのキリスト者はキリストのように生きること、現代のキリストとして、言わば第二のキリストにまで成熟することが理想となる。

Ⅳ. キリストに倣うことの意味・実践・効能

それでは、ここからの話題は、「キリストに倣う」ことの意味・実践・効能という三つの部分に分けて論じられる。まず、第一に、「キリストに倣う」という言葉の意味を考える。第二として、キリストに倣うことを実践にどのように生きるのか、を問う。つまり、生き方の問題を考える。そして、第三として、キリストに倣う生き方をしたらどのようなことが起こるのか、を考える。つまり、キリストに倣うことの意味、どこに到達するのか、どのような効果があるのかを説明する。

1. 「キリストに倣う」という言葉の意味について

「キリストに倣う」ということは、決して難しいことではなく、むしろ、あまりにも単純なことである。——その動きは、キリストからの呼びかけを聴いてから、その呼びかけに感謝して応える、という二つの動きに集約される。つまり、「聴いて受け容れること」と「感謝して応えること」がセットになっている。

「キリストに倣うこと」には二つの側面がある。——まず、①「キリストからの呼びかけを実感すること」。そして、②「キリストに感謝して応える」こと。つまり、キリストと出会いながらもキリストをあかししてゆくという受動性と能動性の両面をともなうふるまいをとおして前進してゆくことが欠かせない。

私たちは洗礼を受けたときに、キリストの呼びかけを聴いてキリスト者になった。そして、信者としての生活をとおして感謝して応える道をたどってきた。そのような尊い歩みを、プロとして生きようと志す場合、誓願を立てて決死の覚悟で新たな生活スタイルを自覚的に選ぶ。キリストの呼びかけを、もっとはっきりと集中的に聴いて答えようとする。そして、誓願の生活をとおして、キリストに感謝して応えるという歩みをよりいっそうまごころこめて生きることになる。

ということで、洗礼を受けたすべての人も誓願を立てた人も、共通していることは、「キリストの呼びかけを聴いてから感謝して応える」という点である。その要点は、どのキリスト者にも共通している。しかし、誓願を立てる人は、もっと専門的にプロとしてキリストに倣う日々を過ごす。集中して道を究めることになる。誓願の意味は、神と隣人に対して信頼を

寄せながら奉仕する生き方を徹底的に究めるための決意を立てることである。自分の立場や自分の好みに左右されずに、相手に向かってゆく、相手を優先して支えること、それが誓願である。だから自分勝手な自己中心的な性質を清めてゆき、ひたすら相手に向かうことが重要となる。

私たちは、自分の欲求や望みを完全に消すことはできない。それを清めるだけで人生は終わりを遂げる。絶えず闘いながら、自分のわがままな性質を他の人へ奉仕する性質へと転換させてゆくことが重要となる。ままならない自分の性質を洗練させて深めること。完全に自分を消すことはできないので、なるべく他の人といっしょによるこべるような開放的な状態に自分の在り方を持ってゆく必要がある。

2. 「キリストに倣う」という実践——特に清貧を手がかりにして

第二の項目に入る。「キリストに倣う」という実践は、使徒たちの生活を真似することである。その際に、三つのポイントがある。——一つ目は、相手（神と隣人）に開かれて生きること。二つ目として、使徒たちと同様に共同生活を送ること。三つ目として、キリストの福音を生きること。ということで、十二使徒の真似をするには三つのポイントを押さえるとよいと言える。他の相手に心を開き、共同生活を送ることといっしょに助け合い、キリストの福音を広げること。これらの三要素を深めれば、私たちは立派なキリスト者となることができる。しかも、その道をプロとして生き抜いてゆけば、誓願の日々を洗練させる使徒として成熟してゆけるようになる。

二千年間つづいてきたキリスト教の歴史は、これら三点を深める信仰者たちの協力態勢に裏打ちされている。それで、各時代の人びとの様々な要望に沿った修道会が設立されたが、どの修道会であってもこれら三点を規準にしている。今日においても、教皇庁（バチカン）が修道会を認可する際に、これら三つの要点が入っているかどうかで判断する。他の相手に対して開かれているかどうか、共同生活を送っているかどうか、キリストの福音を宣べ伝えているかどうか。これらの三要素が重要となる。これらの三要素のひとつでも欠けると修道会としては認められない。しかも、その会のメンバーは修道生活をしていないことになってしまう。

では、どうしてこれらの三要素が重要かと言えば、逆のことがらを考え

ると理解しやすい。つまり、相手から遠ざかって自分の内側に閉じられてしまう生き方をする孤独な状態だと何の实りも生じない。そして、自分勝手に動いて好きなことだけをやってもキリストをあかすことができない。さらに、自分の考えとか一時的なおもいつきだけを宣べ伝えていたとしてもキリストのおもいとは離れてしまう。私たちは閉じこもりたくなる場合があるし、自分のやり方を押し通してものごとを運営してひとりで生きてみたいと考えてしまう場合もあるし、自分のおもいや不平不満だけをおもいきり他者に対して投げかけたい場合もある。

こういう三つの破壊的な態度を表明したくなるという限界のなかで生きているのが人間である。そういう破壊的な衝動を常に清める必要がある。つまり、他の相手に対して開かれて、共同で仕事をして、キリストと同じおもいに満たされて生きることが肝要となる。そういう努力を積み重ねてゆくときに、実は、仕合わせな状態が開かれてくる。たとえば、私たちが誰か他の人に対して、とくに子どもとか、弱い立場に追いやられている相手を受け容れるときに、仲間が増える。そばにいる相手を認めるという単純な仕儀をとおして、仲間となる。仲間が増えると、今度は自分が困った状態におちいったときには助けてもらえる。そして、自分も相手を助けることによるよこびを感じる場合もある。相互の交流が深まることで、もちつもたれつで、いっしょに生きることの愉しさが生じてゆく。他の相手といっしょに生きることがよこびを増大させる。しかも、共同で仕事をすれば、自分が十分にできないことも他の人が支えてくれるので、もっと予想外の実りが生じてくる。そして、自分のわがままや勝手なおもいよりも、イエス＝キリストのよこびを伝える努力を積み重ねてゆけば、他の人もいっしょによこびやすくなる。

だから、三つのポイントというものは、生きるのは非常に難しいのではあるが、それらを少しずつ深めてゆけば、自分を越えたところの仕合わせが増えてゆくので、自分の居場所ができてゆくことになる。他の相手に奉仕して開かれてゆくことが、結果的に自分をも豊かに満たすという現実がたしかにある。相手も自分もよこんでゆけるようになるからである。

今から、三つのポイントに共通する一番重要な事柄を解説してみる。それは、相手に対して開かれてゆくという点である。この点は、ふつうは「清貧」という言葉で説明される。清貧というのは、何かを我慢して貧しく生

きること以上に、自分の持ち物とか才能をすべて他の相手に捧げ尽くして奉仕する、言わば相手に開かれるということにこそ特徴がある。こだわらずに、即座に相手に関わられるやわらかさがあるということが清貧である。つまり、清貧とは、決して「やせ我慢」ではない。他の相手といっしょによるこぶゆとりをもつことが清貧の極意である。だから、自分にこだわらない自由さがあることが清貧の特徴である。清貧は融通無碍な状態である。融通がきいていて、自分にこだわらない大らかさがあること。鷹揚な姿勢で生きていられること。そういう状態で生きてみると、他の相手の長所を認めることができるし、相手の利益をいっしょによるこんでいられるようになる。そして、何よりも神のメッセージを屈託なく受け容れることができる。心にゆとりがあるので、何もこだわることのない自由な人間というものは、それだけまわりの動きに敏感に反応して、すべてを受け容れる度量の大きさを示すことができる。

自分の都合を横に置いて、他の相手のことを優先する、相手にとってよいことを物語るという経験が清貧の実践となる。とくに、修道者は清貧の誓願を立てることで、私有財産を所有しない生活を送る。その意味で、自分の持ち物や自分の都合から解放されている。家族からも解放されている。それは、出会う相手といっしょに生きて、もっとよろこびを幅広く増やすために、自由な生活をしていることにもとづく。結局は、奉仕する心構えで常に生きることが大事になる。

自分の力で何かをするのではなくて、神だけに信頼して、自分の生き方そのものを他の相手に捧げて奉仕すること。この歩みを歴史上最初に、はっきりと見せてくれたのがイエス＝キリストである。彼は宣教活動に入る直前に荒野に退いて、悪魔から誘惑を受けた。そのときに、すべてにこだわらずに生きるという姿勢を貫く。つまり、パンと権力と自分のいのちにこだわらないという宣言を悪魔に対して成し遂げた。そのことは、ルカ福音書4・1－10に描かれている。

パンと権力と自分のいのちというものは、富と権力と名誉とも言い換えられる。これは、人間にとって重要な三つの支えである。これらにこだわらないということは、すごく勇気のいることである。たとえば、お金をためこむことに執念を燃やす人がいる。しかし、お金をいくらためこんだとしても、際限がないので、ますますエスカレートするばかりで、いつのま

にかお金をためこむことが目的となり、自分の生活がせちがらくなる。常に不安にかられて、お金の勘定ばかりをしているだけで、自分の人間らしいゆとりのある生活が犠牲になる。まさに、お金の奴隷として毎日が過ぎてゆくだけである。

しかし、お金に縛られていない人は、他の相手のよろこびを優先するので、相手にプレゼントしたりして、いっしょに人生を愉しむ。ゆとりのある生活ができるわけである。

パンと権力と自分のいのちに関してだが、現在の社会は、これら三つを追い求める状況になっている。食べ物をはじめとして、自分の生活を豊かにしてくれる物質的な利益だけを求める動きが加速している。そして、権力への欲求もとどまることを知らない。家庭でも職場でも学校でも、他人を支配して自分のおもいどおりに動かそうとする権力志向が必ずある。こういう欲望は、よいことを志す人にも見受けられる。権力への欲望は案外と誰もが陥る罠なのである。人間というものは、よいことをするために、まず、権力を握ろうとする。そして、自分のいのちにこだわって、自分を守ろうとする自己保身の姿勢が生じてくる。

このような三つの動きが混ざってゆくなかで、それらを中心にした社会の動きが果てしなくつづく。あくなき快適さを求めたり、自分の都合を優先するような快樂主義がはびこったりする。快適さや快樂がエスカレートするときに、パンと権力と自分のいのちを死守しようとする人間の罪深さが社会のなかに根を張ってゆく。総合化された欲望。

女性も男性も、生物学的な自分の子孫繁栄欲求に突き動かされる場合もある。女性としての性質や男性としての性質が自己中心的にだけ発動されると危険である。ほんとうは相手を支えるためにこそ存在している女性性や男性性が自己中心的な欲望だけにもとづいて用いられるならば、人間は相手を見捨てた身勝手なだけものとなる。自分の能力を相手を活かすために活用することをせずに、自分の利益のためだけに相手を道具として利用するという浅ましさがつのってゆくだけとなる。

性的な物象化。——自分の性質だけを優先して、相手の性質を手段として利用するのだから、相手の性質を品物として巧妙に搾取して私腹をこやすことにつながる。相手を認めず、相手の人間としての尊厳を奪うことになる。相手を所有物として、物として扱う、道具にしてしまう。相手のもつ

ているよい性質を、自分の利益のための手段にしてしまうという発想が社会のなかにある。これは、全部、物質的な富への欲望や支配欲や名誉欲ともつながっている。

こういうことは、イエスの時代にもよく見受けられた。イスラエルの社会では、男性は女性と結婚するときに、子どもが生まれえない場合に、その女性を離別することが可能だった。子孫を繁栄させるために、女性を子どもを生み出すための道具にしてしまうという社会的な動きがあった。女性の個人的な尊さが認められていなかった。そのような社会の流れのなかで、子どもを産むことができなかつた女性は家庭のなかで冷たくあしらわれて差別されたり、勝手に離縁されてしまったので、路頭に迷い、生活が保障されなかつた。これは、まさに男性中心のものの方であり、女性の性質が評価されずに酷使されるだけの所有物と見なされる哀しい動きである。イエスは、そういう社会の風潮と徹底的に闘う。相手がどのような人間であるとしても、相手が人間であるというだけで、生きる権利があるということを、イエスが身を以て示した。イエスは、社会の風習にこだわらないやりかたで相手と関わる。パンや権力やいのちにこだわる自分勝手な人びとの気ままな動きに対して、イエスは常に警告を発しながら闘いつづけた。

イエスの生き方をまねた弟子たちもまた、のちに使徒たちとして成長してゆくのだが、ともかく目の慾・肉の慾・生活のおごりを棄てて、それらにおちいらないように生きた。弟子たちはイエスのまねをしながら、何ものにもとらわれない生き方を目指した。聖書のなかにはさまざまな説明の仕方がある。富と名誉といのちという説明の仕方をとおして自己中心的な生き方から清められると述べる場合もある。そして、ヨハネの第一の手紙2・16のように、「目の慾・肉の慾・生活のおごり（自分の生活上の自慢）を避けよう」と述べる場合もある。とくに、いまの日本の動きを見ると、女性の人はファッションに興味がある。さまざまなブランドにまつわるテレビコマーシャルを見ながら、女性たちはモデルのまねをしたいと考える。つまり、目新しいものや美しいものに目を奪われるということが、しばしば起こってくる。ですから、これはまさに目の慾の状況の社会が当たり前になっている。そして、少しでもおいしいものを食べたいという、言わば自分の身体的な欲求に流されて生きる人もいる。おいしいものを食べすぎ

て太ってしまうということも、しばしば起きており、それでダイエットが商売としてはやる。肉の慾の問題は、無秩序な食べすぎと過度のダイエットに行き着く。生活のおごりというのも、自分を優先して他の人びとを無視してしまう動きであり、自分だけにこだわってしまうあまり、まわりの人のことをおろそかにする動きである。どちらかと言うとヨハネの第一の手紙のメッセージというのは、ちょうどいまの日本社会の動きを見事に言い当てている。そして、先に述べたルカの4章の文脈に登場するパンと権力と自分のいのちにこだわる姿勢というのは、これはとくに男性社会のなかで起こってくる問題点である。

こういうかたちで、聖書は女性とか男性とか、皆にあてはまる問題点をまんべんなく指摘してくれる。女性と男性に共通するあらゆる問題点をさまざまな聖書箇所があぶりだしてくれる。いまの私たちは聖書を一人一冊もっているのだから、聖書のあらゆる箇所を参照することで、あらゆる人間の問題点を真剣に眺める機会に恵まれている。その点で、私たちは得をしている。むかしの方々の生きていた時代は聖書そのものがまだ一冊にまとまっていなかった。そして、文字が読めない人もいたのだから、いまと同じように聖書を総合的に読めるわけではなかった。

3. キリストに倣うことの効能

キリストに倣うことの効能は、相手に対して自らを余すところなく捧げ尽くして相手を幸いな状態へと活かし直す御父なる神の意志を実現することである。御子イエス＝キリストは、まさに御父なる神の意志を全身全霊で生き抜いて証した。その意味で、キリストの意志は神の意志と本質的に同一なのであり、キリストは一瞬たりとも自分自身のためにあらゆるものを利用することがなかった。古代ギリシア教父の三位一体論の視座に立って言えば、相手を活かして慈しみ神の意図を、キリストが最も十全に汲み取って生きたのであるから、その生き方において御父と御子とは常に連動しており、その両者の一致が愛のはたらきとしての聖霊のダイナミズムと化してゆくのである。こうして、キリストに倣うことは、御父・御子・聖霊のはたらきの一貫性を身に受けて実践することで社会全体を新たな次元の歩みへと洗練させる道であることが見えてくる。

V. 「傾聴」の姿勢——神のことばを聴き、隣人の痛みを理解すること

これまで、キリストに倣うことの意味・実践・効能について考察してきた。ここでは、キリストに倣う際の信仰者たち（キリスト者）の態度そのものについて眺めておきたい。

1. 神の呼びかけを聴く——聖書と隣人から

キリスト者は常に神のことばを聴き、この世のあらゆることがらからも有益なメッセージを学ぶ。その際に、「傾聴」の姿勢が重要になってくる。新約聖書を読むと、イエス＝キリストが「聴く耳のある者は聴きなさい」と述べている。このイエス＝キリストの呼びかけを、心を込めて聴くことが信仰者にとって大事である。彼の発する言葉を直接に聴くと同時に、弱い立場に追いやられたあらゆる人々を受け容れて支える仕儀においても、私たちは相手の存在そのものをおしてイエス＝キリストからの呼びかけを聴くことになるからである。つまり、自分の我意で心を満たして自己主張の言葉を一方的に吐くのではなく、むしろ聖書と隣人に聴くことこそがキリスト者の信仰生活の極意である。

旧約聖書において描かれているように、御父である神もまた「聴け、イスラエルよ」と、繰り返し呼びかけている。神の呼びかけを聴くことが人間には常に求められている。相手の呼びかけに耳を傾げるのか、それとも自分の望みを押し通すのか、信仰者にとって人生は常に二者択一の連続である。

聖書の言葉を黙想しながら謙虚に生きているキリスト者は、社会のなかにおいても出会う相手の心のおもいを察することができるようになる。相手もまた大切な神の子であるのだから、神の呼びかけを大切に受け留めることができているキリスト者にとって、あらゆる相手もまた神とつながっている大切な存在としてかわるべきものとなる。弱い立場に追いやられている相手の心の叫びがそのまま神の呼びかけであるわけで、その相手をおして神が私に語りかけてくる。マザー・テレサをはじめとして現代の数多くの聖者たちが身近にいる人間たちをていねいにもてなしたのは、まさに相手の心の奥底で叫びをあげている神を受け容れることでもある。

2. 現代の「傾聴」の技法とキリスト教

ところで、現代の心理学や精神医学やカウンセリングの動向において、「傾聴」という視座が尊重されてきている。相手の話に耳を傾けることで、相手そのものを全人格的に受容し、肯定し、相手とともに生きる技法が「傾聴」の姿勢である。自分の立場で相手を裁くことなく、むしろ相手の身になって考えてみるのが重要視されてきているわけである。参考として、「傾聴」の技法に関して的確に述べているエーリッヒ・フロムの見解を以下に引用しておこう。彼は精神分析の専門家として語っているのではあるが、キリスト者が「傾聴」の意義について学ぶ際の参考になる。

——「我々が確かに言えることは、精神分析は人間の心、とりわけ意識されていない部分を理解する手続きである。それは詩の理解にも似た技＝アートである。すべての技と同様に、この技はそれ自体の規則と規範がある。

*この技を実践するための基本的な規則は、聴き手の完全な集中である。

*聴き手は、重要なことが何も頭に浮かばないようにしなくてはならない。食欲だけでなく不安からも、最適な形で解放されていなければならない。

*聴き手は、自在に働く想像力——言葉で表現できるほど十分に具体的な想像力を持たねばならない。

*聴き手は、相手に感情移入する能力を備え、さらに他者の経験を自分の経験のように感じられるだけの強さを備えていなければならない。

*そのような感情移入を可能にする条件は、愛する能力にとって決定的な一面である。相手を理解するとは、相手を愛することを意味する。それは性愛的な意味での愛ではなく、相手に手を差し伸べ、それでいて自分を見失う恐怖を克服しているという意味での愛である。

*理解することと、愛することは不可分である。この二つが分離しているなら、それは知的過程であり、本質的な理解への扉は閉ざされたままとなる。

セラピー的過程の目標は、無意識的な（つまり抑圧された）情動や思考を理解することであり、その原点と作用について、気づき、理解することである」（註4）。

しかし、「傾聴」の技法は今に始まったことではなく、むしろイスラエ

ルの伝統において旧約時代から連綿と受け継がれてきていたのであり、信仰者として生きる者ならば知らず知らずのうちに身につけていた生き方そのものだったのである。とくに、イエス＝キリストは「傾聴」の技法を自然体の生き方そのもので体現していたと言えよう。新約聖書のいたるところを読むたびに、イエス＝キリストの姿勢には感銘を受けざるをえない。

3. 愛情表現を学ぶキリスト者

キリスト者は終生にわたって神と隣人に「傾聴」する姿勢で生きてゆく。自分の殻に閉じこもって、神や隣人を拒絶して、かかわりを断つ生き方ではなく、むしろ神と隣人とに開かれた生き方を志すことがキリスト者のキリスト者らしさである。人間はこの世に生まれ出たときから常に周囲の物事を聞き分けながら新たに出会う相手や物から物事の真相を学びつづける。新しい事態に直面して、自分を明け渡しつつ、世界とかかわってゆく。しかも、相手から愛情のよろこびを身に受けて、その同じ愛情のよろこびを相手にもお返ししていくことの繰り返しをとおして、人間は真の人間へと成熟してゆく。その愛情表現のキャッチボールの積み重ねを意識的に深める覚悟を身におびて生きる道にふみだしたのがキリスト者である。キリスト者は愛情表現を学ぶことに対して自覚的な努力を積み重ねる。キリスト者は、相手とかかわるときに自分の気分や感情に左右されずに、理性と意志をフルに働かせて努力することができる。まさに、神から学び、相手からも学ぶ姿勢が、キリスト者の信仰生活の基本なのである。

VI. 「高悟帰俗」(こうごきぞく)の極意

これまで、キリスト者にとっての「傾聴」の姿勢をキリストに倣う際の要諦として理解してきた。ここでは、日本文化を背景とする日本社会において、どのようにキリストに倣う生活を洗練させることができるかを模索してみたい。

高悟帰俗。高く悟りて俗に帰るべし。——服部土芳の三冊子(白冊子・黒冊子・赤冊子)の一冊である赤冊子のなかに出てくる恩師・松尾芭蕉の創作技法への言及の一文である。「風雅の心を高く悟り、日常生活のありのままに目を向ければ俳諧の世界は無限に開かれゆく」という意味である。これが俳諧の作法である。芭蕉の弟子たちは「風雅の誠」という言葉

を恩師の言葉として頻繁に引き合いに出す。しかし、「風雅」という言葉そのものは『詩経』に登場しており、「詩文の母胎となる美意識」を指していた。「高悟」とは、厳しい修行の果てに真実を体得することであり、完徳の道である。

ところで、日常生活を味わい深く生きることが、日本人のひとつの特徴だと言えるだろう。何事に対しても感謝して生きる感覚が、日本人の日常生活のなかに行きわたっているからである。このような感性は、「恵みを実感する感覚」とも言い換えることができる。キリスト教信仰の立場にもとづいて表現すれば、「日常を神とともに生きる靈性」と言うことができる。こうして、キリスト者の生き方も、「日常生活において神との親しさを実感していくこと」に尽きるのだから、日本人の生き方の感覚とも重なる視点を見つけ出すことができる。たとえば、仏教的な発想では、「菩薩道」が日常生活の味わいとつながってくる。人間が自分の真実の姿を求めて坐禅し、あらゆる偏見から解放されて「くもりのないまなざし」で物事とをありのままに眺めることができるようになったときに、「悟り」(＝あらゆる偏見から解放されること)の境地に達するのだが、その悟りの境地からも解放されて日常のありきたりの生活をさりげなく大切に奉仕していくことが「菩薩道」である。

「菩薩道」あるいは「悟りの境地」とは、悟りを開いた覚者が、なにもものにもとらわれない、解放された生き方に満たされつつも、あらゆる人びとのもとへ立ち戻って、いつくしみ深く寄り添って歩むことであり、あらゆる人にも悟りの境地のすばらしさを味わわせる奉仕に邁進することである。まさに、悟った後に、世俗の民衆の元に戻って奉仕に徹する生き方が「菩薩道」である。悟りの豊かな恵みを決して独り占めすることなく、かえって幅広くあらゆる人びとに対して心を開いて分け与えていくことが大切にされている。

日本の宗教的生活のみならず日本の文藝活動においても、「菩薩道」と同様の発想が息づいている。たとえば、日本の室町時代、つまり14世紀から15世紀にかけて活躍した能役者の世阿弥の「却來花」(きゃくらいくわ)の発想や安土桃山時代の千利休の「一期一会としての喫茶」の発想、さらには江戸時代の松尾芭蕉による「高悟帰俗」の発想が共通して「高い境地から俗世間の日常を当たり前生きることで周囲にも味わいを広げる

こと」を目指している。

まず、世阿弥の「却來花」の発想とは、至上の藝術的演技力を磨き上げた役者が、あらゆることを犠牲にして演技訓練にまい進し、厳しい鍛錬の果てにたどりついた藝術的境地に満足せずに、さらにその境地すらも棄てて庶民の通俗的な要求（日々の労働に明け暮れて疲れ切った庶民が、気晴らしを求めて、笑いをさそうような演技を役者に期待すること）に応じて身軽な演技を披露していくことである。高きに至ってから低きに降る自由闊達な態度が貫かれている。

次に、室町時代の武野紹鷗から安土桃山時代の千利休に至る茶道の流れにおいても、死を覚悟するほどの有終の美を意識しながらも「最期のお茶」をかけがえのない今において飲むという「悟りの境地の喫茶」が究められていきたが、そのような至高の境地すらも棄てて、軽妙に日常の当たり前の「喫茶」を愉しむほどの自由闊達さが茶道に独特な味わいを呼び覚ましている。食事のときにお茶を飲む。——心をこめて、最期のお茶であるかのように、大切に飲むことで、日常生活そのものが深い悟りのひとこまとなってゆく。

さらに、松尾芭蕉の俳諧の世界においても、高い悟りを求めて、独自の藝術的境地に至りながらも、そこから解放されて普通の日常生活の場に戻ってゆく姿勢が見受けられる。言わば「高悟帰俗」という用語で表現されている事柄が、そうである。——究極の悟りの境地に高められていった修行者が、悟った後は、再び俗世のありきたりの毎日の生活に埋没することで、悟りの境地を日常化してゆくのである。

高い境地に向かう努力を積み重ね、至上の境地に至ってからも、そこから解放されて、周囲の人びとの間に溶け込んで、日常の当たり前の生活を味わい深く、さりげなく、ひっそりと生きつづけること。——悟りを独り占めしないで、心を開いて日常の場に帰る「ゆとり」あるいは「遊び心」を生きることが「おだやかでほほえましい雰囲気をかもし出す慈愛に満ちたふるまい」につながる。本当の実力者は、親しみやすく、気さくな、おだやかさを漂わせているものなのではないだろうか（註5）。

VII. 奉獻生活の問題点とその乗り越え方

ここで、奉獻生活そのものに視点を移そう。あらゆる人は「自己中心的

な人間」として、つまり「エゴイスト」としての限界を抱えて生きている(註6)。この現実を見直そうと努めながらも、なかなか十分な態度をとれないまま時が流れ過ぎてゆくのが人生というものであるだろう。

しかし、「自己中心的な人間」とは逆の方向に向かう人間は「愛を生きる人間」だと言える。つまり、「相手(神と隣人)に心を開いて生きる人間」としての奉獻生活者の存在意義は「愛を生きる人間」の道があることを証しする点に存している。

1. 自分にこだわりすぎること——奉獻生活を邪魔する根本的な問題点

修道会で共同生活を送っている私たちは、長くつづく日々の歩みの連続において奉獻生活に適応できるときと、適応できないときを経験する。自分にこだわりすぎているときには奉獻生活に不満をいだき、適応できなくなる。自分勝手に生きてみたいという望みにさいなまれるからである。逆に、相手(神・隣人)を優先しているときには奉獻生活に創造的な可能性を見い出して燃えているので、適応しやすくなる。相手といっしょに楽しむよろこびを実感しているからである。こうして考えてみると、奉獻生活を邪魔する根本的な問題点は「自分にこだわりすぎる態度」だと言える。

2. 問題点の乗り越え方——相手から大切にされる経験と相手を大切に する経験

それでは、自己中心的な態度、つまりわがままな姿勢、あるいは自分にこだわりすぎる人間の傾向を清めていくには、どうすればよいのだろうか。つまり、問題点を乗り越えるには、どのような方法があるのだろうか。

まず、何よりも、相手から大切にされる経験と相手を大切に
する経験が重要になる。自分のことしか見えていない人は、相手から受けた恩を忘れており、自分の小さな趣味の世界にこだわるあまり、誰かを愛するよろこびを避けている場合がある。

人間は、自分の狭い世界に閉じこもる傾向をもっている。それは自己保身であり、自分の出来ることだけで満足している凡庸な状態である。つまり、面倒なことには関わりたくないという気持ちによって私の心が支配されているときに、私たちは神の呼びかけに耳をふさぎ、社会の人々の現状

を見ていない。「自分は、とても相手を愛することができない」という心理状況が私たちの行動にブレーキをかける。このような自分が善いわざを行うのは無理だと、何もしないうちから諦めてしまう。

自分の都合だけを考えて、せせこましく生きる私たちが、その限界状況から抜け出すには、ありのままの自分を神や隣人の前にさらけだして善いわざを行ってみるしかない。まず、そのまま行動してみる。思い切って「愛情を込めて相手に親切にしてみる」ときに、事態が好転し始める。

以上、古代ギリシア教父による三位一体論の視座を考慮に入れて、「キリストに倣う」という根本視点を基軸にしながらも教皇ヨハネ・パウロ二世の『奉獻生活』の枠組みを参照し、奉獻生活の意義を日本文化および現実生活とも関連づけて考察してみた。こうして、奉獻生活の伝統を確認すると同時に、現代的な方向性を探る機会をつくることができた。今後は、筆者および読者をも含めたキリスト者ひとりひとりが実際の生活実践をとおして「奉獻することの尊さ」を深く味わうことが欠かせない。

註

- (註1) 教皇フランスコ使徒的書簡『奉獻生活の年にあたって』バチカン、2014年11月21日付、参照。
- (註2) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勅告『奉獻生活』カトリック中央協議会、1997年、20 - 69頁（第一章）も参照のこと。他に、以下の神学書も参照のこと。John O'Donnell, *Introduction to the Dogmatic Theology*, Piemme, Casale Monferrato, 1994, pp.117-119.
- (註3) 邦語版は、教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勅告『奉獻生活』カトリック中央協議会、1997年。
- (註4) エーリッヒ・フロム著、堀江宗正・松宮克昌訳『聴くということ——精神分析に関する最後のセミナー講義録』第三文明社、2012年、318—319頁。
- (註5) 拙著『神さまにつつまれて——キリストをとおしてあったまる』オリエンズ宗教研研究所、2007年、164 - 167頁、を参照のこと。
- (註6) 八木誠一『増補 イエスと現代』平凡社、2005年、91頁を参照のこと。——「エゴイズムとは、神とも隣人とも無関係に自分で自分の気に入った自分を選びとり、これを立て貫き、ひとも押しつけることであった」。なお同書65頁では以下のようにも述べられている。——「それ（エゴイズム）は要するに『愛において神を知る』あり方の否定なのである」。